

韓国・ソウル市における幼少年サッカークラブの組織モデルの比較 —サッカークラブにおけるアイデンティティの形成に着目して—

Comparison of the organization model of the boy's girl's football teams in South Korean Seoul city —pay its attention to formation of the identity in a football team—

田 簀 健太郎

Kentaro TAMINO

I. はじめに

大韓民国(以下、韓国)は、1970年以降「ハンガンの奇跡(한강의 기적)」といわれるほどの経済成長を達成し、現在では、世界有数のIT国である。そして、2002年6月には、FIFAワールドカップが日本との共同によって開催された。当該大会では、韓国が悲願のワールドカップ初勝利を達成しただけでなく、ベスト4まで進出する快挙を成し遂げた。この間、韓国戦が行われるたびに、韓国内が熱狂の渦に巻き込まれた。とりわけ、ソウル市庁前には、何万人もの人々が集まり、韓国代表チームを応援した。

こうした盛り上がりは、その後、急激に下がることはなく、現在でも国際大会等では、大いに盛り上がっているといつてよい。

このような状況の中、昨年来、筆者は、近代都市における近代スポーツ(競技スポーツ)に焦点をあて、研究をおこなってきた。なかでも盛り上がりを見せるサッカーを対象としながら、幼・少年期にいかに関心としてのアイデンティティの形成にサッカーが役割を果たすのかという課題のもと、幼少年サッカー¹⁾について研究を進めている。

これまで、このような視点に基づいて研究されてきたのは、専ら民族スポーツ(伝統スポーツ)を対象としたものであった。

それゆえ、近代スポーツを対象に研究されたものはほとんど皆無である。

以上のような視点から、2003年8月に、再度、韓国・ソウル市での集中調査を行ったので、報告書としてまとめておきたい。

調査対象は、Cサッカークラブ及びSサッカークラブである。

なお、本報告書で用いた資料は、2003年8月4日～25日に韓国・ソウル市で行った集中調査で得られたものである。

II. Cサッカークラブの事例—元有名選手による経営モデル—

1. Cサッカークラブの概要

Cサッカークラブ(以下、Cクラブ)は、1989年に設立された小学生(6～12才)を対象に運営されるサッカークラブである。

Cクラブの監督を務めるのは、T氏である。T氏は元韓国代表選手であり、ドイツのブンデスリ

ーガのアイントラハルト・フランクフルトで活躍した選手である。1979年には完全なプロの立場でドイツに渡った韓国初のプロサッカー選手であるとともに、1989年まで10年間プレーし、308試合で98得点を記録した。この数字は、ブンデスリーガでプレーした外国人選手の最高得点記録である。ドイツのスポーツ雑誌『Sport Live』でも、「ブンデスリーガでプレーした歴代最高の外国人選手だ」と称賛されている。

こうした経歴を持つT氏の下に韓国プロサッカーリーグ（以下、Kリーグ）で活躍した元選手たちがコーチとして子どもたちの指導をしている。

コーチはT氏が直接スカウトする場合と、推薦による採用がある。推薦による場合、元代表選手や元Kリーガーは、即採用される場合が多いが、その他の推薦の場合、3ヶ月間の研修期間を経て、採用されるシステムである。

現在、T氏はソウル市内にサッカークラブ（以下、教室）を7カ所保有し、会員数は1,500名である。なかでも、ソウル市内を流れるハンガン沿いにある教室は、多くの会員を集めている。

入会に際しての規則等はなく、直接教室へ申し込む。会員には、海外子女も含まれている。

教室のメインスポンサーには、T氏が現役時代に活躍したドイツの企業がついており、その他のスポンサー企業からは現物支援を受けている。

ソウル市と賃貸契約を結んでいるハンガン沿いの教室は、大雨になると、水位の上昇とともに水浸しになり、その都度、人工芝を張り替えなければならない状況である。

クラス・練習日及び月謝については、表1の通りであるが、学期末の成績が良くなかった生徒は、練習させない方針とされる。しかし、実際に成績を持ってこさせることはなく、自己申告であることから、厳密にこうした方針が適用されているわけではない。

2. Cサッカークラブの組織モデル

Cクラブでは、T氏の経歴・人気とともに、元

Kリーガーが直接子どもを指導することから、現在1,500名もの会員を確保しているが、1989年に設立してから1999年までの10年間赤字経営であった。ようやく黒字経営に転じたのは2000年からであり、昨年はFIFAワールドカップ大会開催の影響もあり、会員数が大きく伸びたという。実数の変化について、信頼される資料がないため、これを信ずる他ないが、これは、韓国のスポーツ政策と密接な関係があると見てよいだろうと思われる。現在でも、韓国に特徴的であるエリート・スポーツ制度は機能しているが、これまでの勝利至上主義のエリート・スポーツ制度下では、保護者が子どもにスポーツをやらせないということが一般的に広まっている。なぜなら、エリート・スポーツ制度に対する多くの指摘については、先の報告書でも行ったが、競技を続けながら、大学まで進学することのできる者が、ごく僅かしかいないため、保護者は子どもにスポーツよりも勉学を奨めるのである。それが、近年では、楽しむためのスポーツを容認する風潮が高まりつつあり、この変化が保護者の意識にも変化を生じさせたと推察されるのである。

また、会員を集めるための広告費等については、T氏の知人が協力関係を結んでいることから、クラブからの支出自体が少ないという。これは、T氏の個人的関係にクラブが依存していることを示すものである。

さらに、スポンサー集めやコーチ採用システムにもT氏の影響力をみてとることができる。ただし、子どもたちからみれば、元Kリーガーや代表選手が指導することの意味は大きく、自らのアイデンティティの形成にこうしたコーチ陣が果たす

表1 各クラス・練習日及び月謝

クラス	練習日	月謝 (円:ウォン)
A	月・水・金	70,000
B	週2日	60,000
C	月～金	100,000

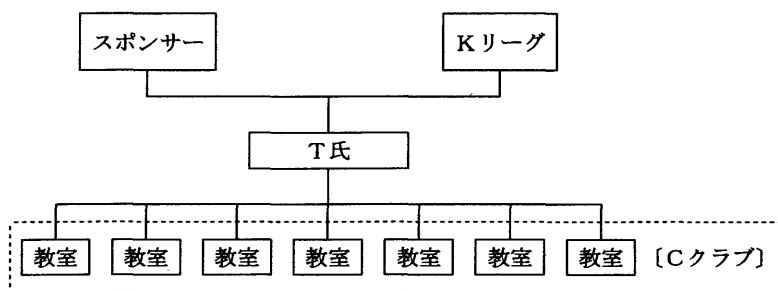


図1 Cクラブの組織モデル

役割は決して少なくないといえよう。別言すれば、元韓国代表選手に指導を受けることによって、憧れを抱き、その選手のようになりたいと感じるのはごく自然なことである。

以上のことから、Cクラブの組織モデルを示すと、図1のようになる。つまり、CクラブはT氏に依存した形態であるといえよう。

Ⅲ. Sサッカークラブの事例—親会社による経営モデル—

1. Sサッカークラブの概要

Sサッカークラブ（以下、Sクラブ）は、昨年度に報告した際の対象クラブである。Sクラブは、株式会社の形態をとったクラブであり、2002年8月に設立された。先の報告書では、施設や教育指針について述べた²⁾。その後、1年が経過したことから、集中調査時に再度、その後の状況について追跡調査を行った。

Sクラブは開業当初は多項目にわたって事業展開する予定であったが、実際には、サッカーのみの事業で展開した。1クラス15～20名、計100名程度の会員を集め、1ヵ月後には200名を集めるにいたっている。

入会金は10万ウォン（ユニフォーム・靴下・プロテクター代込）で月謝は、週1回の練習で8万ウォン、週3回の練習で20万ウォンである。そして、このクラスから上級者を選抜し、エリートチ

ームとして育成するコースを設け、それは毎日練習し、20万ウォンを徴収している。

月謝を高く徴収することによって、クラブのステイタスをあげ、そのステイタスによって、会員を多く集める企業戦略といえる。

また、開業後2ヶ月で、親会社が変わり、現在は音楽配信会社のB社が経営している。

この経営交代が物語るように、開業1ヶ月で200名在籍した会員が、その年の冬には、80名まで急激に減少し、春になると若干増加するという現象がおきた。

この理由について、詳細な資料を持ち合わせていないために、判断することは難しいが、インフォーマントの情報提供では、新親会社の社長の経営方針と現場との乖離があげられる。それは、経営側が選手を育てた後に他クラブに売却することを構想していたのに対し、現場では、自らのチームで育てていきたいと希望していたことである。

こうした状況の中では、社員に対して給料を支払うことも困難となり、経営不振に陥る結果となった。その結果として、クラブの監督が辞任するという事態が発生した。

この事例から判断できることは、月謝がCクラブと比較しても相当高く設定されていることが、会員の流出を防ぐことができなかったと考えられる。また、コーチ陣は大学サッカー部出身者とKリーグ出身者というものの知名度が高くない者であったことがあげられる。

2. Sサッカークラブの組織モデル

Sクラブは図2に示す組織で運営されている。これをみると、先に指摘されたとおり、経営陣と現場が分かれている。つまり、現場の意思が経営陣には伝わりにくい構造をもっているといえよう。

また、エリートチームを設けることにより、クラブの強化及び宣伝効果をあげる企業戦略を読み取ることができるが、結果として、エリートチームは少数精鋭となり、下部組織が一部のエリートチームを支える構造となっている。つまり、ピラミッド型クラブといえる。こうした構造は、下部組織に所属する会員が多ければ維持することは容易であろうが、少なければ困難になることも容易に推察できる。

また、クラブ全体としてのアイデンティティの形成というよりも、下部組織とエリートチームとの二層構造が前提となり、ややもすると、対立構造を形作ることへ繋がる。

したがって、Sクラブは下部組織に属する会員に支えられたピラミッド型モデルと呼べよう。

IV. おわりに

今回の調査では、Cクラブ及びSクラブを対象に集中調査をおこなった。その結果、両チームともに、監督・コーチは実績のある人物が務めているが、Cクラブの監督であるT氏の影響力は非常

に大きいといえる。そのために、CクラブはT氏に依存型のクラブとして成立しており、一方、Sクラブは、下部組織の会員によって一部のエリートチームが支えられるというピラミッド型クラブとして位置づけることができる。

両者の組織に大きな違いは認められないが、監督の影響力の大きさがクラブに与える影響のほう、ステイタスをあげる企業戦略よりも、現実的であったといえよう。

さらに、両者のアイデンティティの形成を比較すると、Cクラブが監督・コーチを中心に形成されているのに対し、Sクラブは二層構造をもち、それぞれでアイデンティティが形成される。したがって、当該構造は対立構造に容易に転換する可能性を孕んでいるといわねばならない。

V. 今後の課題

一昨年、昨年と韓国・ソウル市において集中調査を行ってきたが、実施期間の短さや筆者の語学能力の限界とが相俟って、事例数の少なさと資料の正確さについては、再度検討を要することは、いうまでもない。

これらの点については、資料の再吟味と事例数の確保を今後も引き続き行うこととし、それ以上にアイデンティティの形成に関するアンケートの実施について今後の課題としたい。

なお、本報告書は、2003年度国士舘大学体育学部附属体育研究所研究助成金を受けて行われたものである。

注記及び引用参考文献

- 1) 韓国では、日本で用いられている「少年サッカー」に対する語として「幼少年サッカー (유소년 축구)」が用いられているため、本報告書でも「幼少年サッカー」とする。
- 2) 拙稿：「韓国における幼少年サッカークラブの現状」、『国士舘大学体育研究所報』第21巻、2003.3、pp.123-130

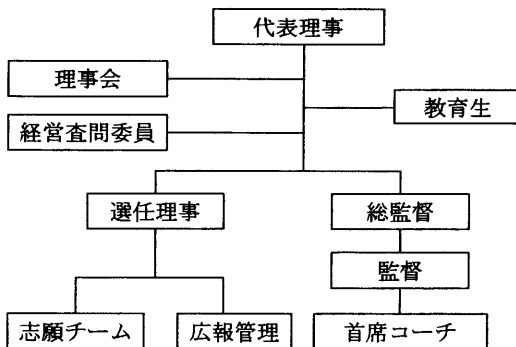


図2 Sクラブの組織図